

## ＜政策科学会2006冬季公開講演会＞

# 懸命に生きる子どもたち

講師 池間哲郎氏

NPO法人アジアチャイルドサポート代表理事

**司会** 池間哲郎さんはNPO法人アジアチャイルドサポート代表理事をなさっておられます。モンゴル、ベトナム、カンボジア、タイ、ミャンマー、フィリピンなどで子どもたちをサポートされ、日本のさまざまな地域で講演をしておられます。主に貧困地域、スラム街での子どもたちの支援についての講演をされています。本日のテーマは「懸命に生きる子どもたち」というタイトルで講演をお願いいたします。それでは政策科学会の小幡先生から挨拶をお願いいたします。

**小幡** 池間さんは、NPO法人をつくってアジアの貧しい人々を支援されているということで、スモークマウンテンなどで生活している人々、エイズに感染した人々を助けておられる。45くらいの支援事業をやっておられる方です。政策科学会は問題を発見してチャレンジして政策を提言することを目的としていますが、今日はアジアの話題を通して、皆さんの中にも体験されたことがある方がいるかもしれませんが、池間さんのお話の中から何が問題であって、自分たちに何ができるかという点も含めて、ぜひ池間さんの貴重な抱負な体験について、お話を伺えればと思っております。

**司会** それでは池間哲郎さん、よろしく願いいたします。

**池間** 皆さん、こんにちは。名前は池間哲郎と言います。私も沖縄の大学で教えている立場ですが、京都の大学生はまた雰囲気が違いますね。ビデオの制作会社で結婚式とかコマーシャルのビデオをつくる会社を営んでいます。その傍らアジアチャイルドサポートという民間のボランティア団体の代表をしております。我々の活動はモンゴル、カンボジア、ミャンマー、タイで活動していますが、モンゴルではマンホールチルドレンと呼ばれる子どもたちの児童保護など15の支援事業を展開して運営しています。カンボジアでは学校を建築しまして、今、3,000名の子どもたちが学んでいます。井戸を掘って、かなり水事情も悪くて、もう100基以上井戸の建築ができました。それからカンボジアでは、地雷被害者がまだ

まだ出ています。両足を失った、片足を失ったという人々を「沖縄村」という農業支援センターを建築して彼らが農業を学んでいます。最も大きな事業はミャンマーで、年間約8,000万円かかります。学校建築で18校くらい完成しました。ハンセン病の人々への差別と偏見がすごいものですから森の中に捨てられる状況だったので。そういう人々が住む施設をつくって今、200人くらいが暮らしています。タイには少女たちが売春婦にさせられ、エイズで亡くなっていきます。そこで残された子どもたちが生きていくのが大変です。そういう子どもたちを我々は保護して生活しています。そういう子どもたちは母子感染でエイズに罹っている場合が多いものですから、5年くらいしか生きられない。ほとんど発病して死んでいきます。エイズ孤児に関して人権問題にかかわりますので、これもぜひ支援していきたい。

今日は皆さんに、こういう人々の3分の1くらいの映像を見ていただきますけれども、この中で何を伝えたいかということ、貧しさの中で一生懸命生きていく子どもたちがいること、子どもたちはどんなに苦しくて辛くても懸命に生きていることを皆さんにお伝えしたいと思えます。私が、なぜこういう活動をするようになったか。もう16年前のことですが、フィリピンのごみ捨て場から始まったんです。スモークマウンテンというマニラで大きなごみ捨て場があったのです。そこに入っていったら当時、3万人以上の人たちがごみの中からビンやアルミ缶を拾って生きていた。子どもたちもいっぱいいて、子どもたちと仲良くなって、日本だと6年生、12歳の少女に「あなたの夢はなんですか？」と聞いてみたんです。その少女は「私の夢は大人になるまで生きることです」と答えました。この言葉が胸に刺さった。私はカメラマンという職業柄、皆さんが想像できない世界にいっぱい行きました。そこには大きな悲しみ、苦しみ、たとえば山岳民族と一緒に暮らしている時には死んだ人にも何度も出会いました。そして中学生くらいの女の子たちが売られていく姿をたくさん見てきた。ものすごく悲し

いです。戦場に行ったこともあるものですから、目の前で人が殺される場面にも出会いました。でもそんな中でも、この女の子の「大人まで生きたいよ」という言葉が胸に残ってしまって、沖縄に戻ってからも悩みました。どうすればいいかと。こういう貧しい国の貧しさの問題というのは非常に深く大きい。私が何かをやったとしても何も変わらない。これが現実なのです。あまりにも大きすぎて。だから何もしないでもいい、ほっといてもいいと思ったのだけど、いろいろ考えた結果、見てしまった以上は何かをすべきだと思った。できることはやっいてこうと誓いましてね、それでずっと支援を続けております。

世界には約65億の人々が住んでいます。そのうち私たちのように豊かな国、日本、アメリカ、ヨーロッパのような先進国に住んでいる人々は2割程度です。残りの80%、50億人以上の人々はアジア、アフリカなど貧しい国、開発途上国に住んでいます。皆さんに知ってほしいことは、私たちのようなこんな豊かな暮らしをしている人たちはほんのちょっとだということ。ほとんどの方が貧しさのために苦しんでいる。そして貧しさが原因で死んでいく人がいっぱいいます。食べ物が無い、安全なきれいな飲み水を手に入れることができない、混乱が絶えない中で死んでいく人々が3秒に1人います。1日に4万人以上が亡くなっている。そして1カ月で120万人、1年間で1,500万人の人々が貧しさのために命を失っていく。さらに深刻なのは、亡くなっていく人々とは大人ではなくて子どもなのです。9割近くは子どもが死んでいく。なぜか。小さくて弱いから。単純です。実は亡くなった子どもたちがどんな病気で死んでいるかということ、我々日本人にとっては呆れるくらい簡単な病気で死んでいることがわかります。たとえばおなかを壊して下痢をした、あるいは風邪を引いた。こんな病気で死ぬことがよくあるんです。日本ではありえない。なぜか。我々は豊かな国に住んでいるから毎日ご飯を食べている。それも3食、おかずも一杯あるから日本人、日本の子どもたちは栄養状態が非常によくて身体の中には病気に対する抵抗力が十分に備わっている。だから小さな病気で死ぬことはありえない。でも貧しい国の貧しい地域の人々の食事は1日に1回ずつなのです。1食だけです。朝御飯か夕御飯だけ。ごみ捨て場にいきまされたけど、そこに住んでいる子どもたちのご飯を最初に見て驚いてしまった。ご飯にお塩をかける。おかずはない。それだけ。

時にはお湯をかけて食べていた。毎日そんな粗末な食事しか口にできないから子どもたちの体は慢性の極度の栄養不良です。病気に対する抵抗力が全くない。だから風邪を引いただけでも死んでいく。そのことをよく知ってください。

このような問題は我々日本人、世界の人々の大きなかわりがあります。実は世界の人たちが食べて生きていけるだけの食糧はあります。なぜこういう貧しい人々が一杯出てくるかということ、豊かな国に住んでいるほんの2割の人たちで世界の食べ物の7割近くを食べてしまう。だから足りないところが出てくるのは当然です。一部の人々が一杯食べている。実は、分け方の問題なのです。日本人が最もかかっていることを自覚した方がいいと思います。アメリカ人と日本人が世界で最も贅沢な人々です。その食生活もあまりにも異常さに比べて貧しい人たちがたくさんいる。日本人の食卓に出てくる食糧のなんと2割近くは残飯に捨てているのです。それをカロリーで計算すると実は7,000万人もの人々が生きる量を捨てている。これは考えなければならないと思います。今は日本中、どこの子どもたちも食べ物をもものすごく粗末にしています。給食の残飯が凄まじいです。今の子どもたちは食べ物が大切だと思っていない。同じアジアの国の貧しい国では貧しさのために毎日多くの人々が死んでいる。その中で私たちの食生活はどうか。そのことをきちっと考えるべきだと私は思っています。

映像を見ながら話を進めていきたいと思います。今日は、5ヶ国の話をします。フィリピン、モンゴル、カンボジア、ミャンマー、タイ。最初に出てくるのはフィリピンのごみ捨て場。スモークマウンテンです。一番大きなマニラの北の方、トンドというところ。トンドにはマニラの人は絶対に近寄らない。なぜかと云えば凄まじい暴力が渦巻いているから。この中に3万人以上が住んでいます。凄まじい臭い、ごみが積まれていくと、ごみが発酵してガスが出る。そこで静電気でパチッと火がついて、ここは1日中、煙が充満しています。だからスモークマウンテン、煙の山と呼んでいた。メタンガス、ダイオキシン、有毒ガスの中に人々が住んでいると言っても過言ではなかった。

どのような人々なのか。特別貧しい人々、田舎からの離島出身者がほとんどで、村にいては食べていくことができない。だから家族を救って生きるために大きな町に仕事を求めてやってきた。でも職もなく、お金も住む場

所もないから、仕方なくごみを拾って暮らすようになった人々なのです。毎日、300台前後のダンプカーがごみを満載してやってきます。そしてごみをブルドーザーが敷いていく。子どもの姿がいっぱいあるでしょう。子どもたちはトラック、ブルドーザーの後ろからついていて、プラスチック、ビニール袋、ビン、アルミ缶、スクラップを拾ってごみ捨て場の周りにあるリサイクル業者のところに担いで運んでくる。そしてお金に代える。ただここは無駄地帯です。こういうところに一人でカメラを持って入るということは殺される覚悟が必要です。本当に危ない。最初の頃は私、紙袋にカメラを隠して隠れて撮っていた。近づかない、なぜか。ポコポコにやられてしまうから。

ここで何が起こっていたか。子どもたちが毎日のように事故にあって命を失っていました。トラックやブルドーザーの運転手は周りに子どもがいようが関係ない。トラックがバックしてくる、それにガンとあたる。ブルドーザーのキャタピラーが回る、そこに子どもが挟まって潰される。そして死んでいく。子どもたちの遺体はそのままごみの中に埋めてしまう。子どもたちは夜明けとともに働く、朝6時頃から仕事を始めて1日10時間働く、そしてもらえるお金は当時、日本円で50円程度でした。たった50円。ただこのような環境です、子どもが生き延びることは非常に難しい。ごみ捨て場で子どもが15歳まで生きるのは3名に1人といわれていた。ほとんど死んでいく。皆さん、右側の少女を見てください。「あなたの夢はなんですか?」と聞いたら「私の夢は大人になるまで生きることです」と答えました。

私は何度もここに行きましたから皆さんとも仲良くなりました。もちろん子どもたちとも。目の前でたくさんの子どものごみを拾っていました。そして、私が「おじさんとピクニックに行くか」と言うと子どもたちがワーッと喜んでね、12名の子どもたちをつれて近くの公園にいきました。その時、私は弁当を持って。日本で1,000円程度のちょっとした弁当。芝生の上に座って一人ひとりに弁当を渡して、皆一緒に食べようと。その中身を見て、皆、ワーッと喜んだ。小さい子どもたちが飛び跳ねている。「こんなごちそうは食べたことがない」と言う。しかしその後、意外なことが起こった。誰もがその弁当を残したのです。4歳くらいの女の子がトコトコと私の前にやってきて目を真っ赤にして泣いている。「おじさんにお願ひがあります」と言うので、「なんです

か?」と答えると「こんな御馳走は私1人で食べることはできません。だからお家に持って帰って、お父さん、お母さんと一緒に食べていいですか?」と聞いた。皆、同じです。誰も皆、食べずに弁当を持って帰ったのです。

この少年はとてもなついてくれた。こういう人たちは自分自身が写真に写されることはまずありません。だから自分が写った写真を一生涯持っている。カメラマンにとって最もうれしいことです。次の年もごみ捨て場に行った。彼らの姿をずっと探してみたのだけど、残念だけど死んでいた。7歳で命を失った。だからこの写真を見るといつも少年のことを思い出してしまう。皆さんにわかっていたきたいのは、大人になるまで生きることにはあたりまえではない子どもたちがいっぱいいるということをよく知っておいてください。フィリピンのごみ捨て場、スモーカーマウンテンの子どもたちです。

ここもごみ捨て場です。しかしここはカンボジアです。貧しい国の大きな町のごみ捨て場には必ず、このような人々が住んでいると思ってい。ここは大人も子どもも犬も関係ない。何か食べられそうなもの、お金に換えられそうなものを生きる為に必死になって拾っている。カンボジアのプノンペン、100万都市、そのごみ捨て場、ステンチェルの中に入ると凄まじい。これを撮影したのは真昼の2時頃です。このように煙が充満して、2、3メートル先も見えない。こんな中に子どもたちも10時間近く働いていた。この少年、当時、9歳です。「あなたの夢はなんですか?」と聞いたら「僕の夢は一回でいいから、おなかいっぱいにご飯を食べてみることで」と言った。このような環境で生きている子どもたちは食べ物で満腹を味わった経験がないのが普通なのです。だから「一度でいいから、おなか膨れるくらいご飯を食べてみたい」という言葉をよく使います。ここに住んでいる方たちはプノンペンの中でも最も貧しい人たちです。ほとんどはお父さんのいない家庭です。お母さんと一緒になって子どもたちは毎日、毎日働いています。少年は13歳。「大きくなったら何になりたい?」と聞いたら「学校の先生になりたい」と言った。「ああそうか、大学まで行かないといけないな、頑張れよ」と言うと、この子どもが俯いて泣きそうになって「おじさん、僕は学校に行ってはいけない子どもなんだ」という。どうしてかと聞くと、この子の家庭はお父さんもいない。お母さんと5歳の弟がいる。でもお母さんが病気なのです。動けない。だからこの少年が働いて家族を守っている。

彼が学校に行くと家族が全滅する。本当に死ぬのです。皆さん、この子は学問が好き、そして根性もある、とても勉強したいと思う。ワーツと泣きました。学校に行きたい。でも行けない。家族が死んでしまう。大きな子どもだけではない、小さい子どもたちも働いています。7歳です。何もつけていませんでしょ、パンツも。履いてないんだ、お金がないから。もっと小さい子、3歳の子。もちろん男の子だけではない、4歳の女の子も働いている。ごみの中で空き缶を整理している。しかしこのような環境では子どもが生きていくことは難しい。この子ども4年前に亡くなりました。一生懸命生きようとしている。でも難しい。

内臓の病気、目の病気、皮膚病もある。100%持っていると思っていい。プノンペンには中古の靴が売られています。ほとんど日本製です。1ドルでいい、でも子どもたちは買えない。ごみの中に入って行く。すると割れたガラスで足を切る、バイ菌の感染症になる。破傷風などで死んでいく子がとても多い。カンボジア政府はごみ捨て場に住んでいる人々、スラムに住んでいる人々をむりやり郊外に移住させている。それがこの場所です。普通の住宅はヤシの葉っぱで囲われた粗末な家です。中に入れば家具らしいものは一切ない。テレビ、冷蔵庫、とんでもない。あるのはご飯をつくるための鍋と釜のみ。我々はこの地に学校をつくることを決定した。この家の少女が「勉強ができる」と叫んでいるところ。なぜこれほど喜んでいられるかというと、このような環境で生きている子どもたちは学校ができたとしても勉強はしてはいけない。なぜかという仕事をしているから。毎日働いてお金を稼いでそれを親に渡すのです。だから親がOKしない限り、学校に行ってもいけない。しかしこのお父さん、優しい方でね、この子どもを前にして「お前はお利口だから学校ができたなら勉強してもいいんだよ」と言ってくれたのです。「ただし2時間だよ。あとは仕事をしなさい」しかしこの少女は文字が読めるようになるのが一番うれしいと言ってね、今、必死になって勉強している。しかし、ここにはプノンペンの人たちは絶対に行きたがらない。凄まじい貧しさです。拳銃の音が毎日している。外国人が歩ける場所ではありません。そんな中でも何とか住民を説き伏せて学校建築を始めたのが2002年1月です。ある程度できたと思ったらガソリンをかけて火をつけられてしまって、それから大工が重傷を負うなど立て続けに事件が起きる。そんな中でも何とか粘りに粘っ

て完成までこぎ着けた。すると人々は自分たちの子どもたちに本当に学校をつくるのだとやっとわかってくれた。開校式には1万人近くの人々が集まって祝ってくれた。うれしかった。そしてこの学校は正式にプノンペンの公立学校として始まったのです。

学校をつくるには何が大事か。校舎は簡単です。日本円で、400～500万円あればできるのです。何が大事かという誰が先生になって、給料を払うか。運営費の問題です。我々は1年以上前からプノンペン市と交渉を重ねて公立学校にするという条件でつくっているのです。実は日本人の浄財でつくられた校舎はありますけれども、廃墟になっているところもあります。私たちの活動は年間2億円近くなりますが、政府、国、県からの助成金は1円もありません。一人ひとりの善意、草の根活動の基本に徹してやっています。沖縄の人たちの善意でつくったもので名前を「沖縄学校」としました。命懸けでしたけど、学校ができたなら子どもたちはものすごく熱心に学ぶのです。この写真は、小学校1年生ですが、中学生のような子どもがいますね。この子どもたちは教育を受けるチャンスさえも与えられていなかった。学校ができたなら皆、駆けつけてきて、1年生から始めたんです。こんな暑い国です。真昼の教室の温度は35℃近くまで上がる。居眠りしている子どもは一人もいない。おしゃべり、とんでもない。しゃべっている奴がいたら皆で飛んできて、ぶん殴るのです。それほど真剣だということです。私はこのカンボジアの子どもたちが学んでいる姿を日本の子どもたちに見てほしいなと思いました。うれしいことにどんどん校舎を増築してだんだん子どもたちが入ってくる。この学校は今ではカンボジアで最も大きな小学校です。3,000名の子どもたちが学んでいます。

黄色の帽子を被っている。この子たちは初めて帽子を被った。被ったことがないんです。買えないから。3,000個私たちが届けたのです。この帽子を届けた時、子どもたちが喜んでる表情が今でも焼きついています。彼らにとっては新品の帽子は夢のまた夢なのです。ですから帽子を渡したら誰一人被らなかつた。帽子を胸に抱いてこうやって喜んでた。とてもうれしかったのでしょ。さあ、帽子を届けて半年後、学校にいきました。校庭にはたくさん子どもたちが遊んでいるけども、誰一人帽子を被っていない。どういうことなのだと、校長を問い詰めた。「折角帽子を届けたのにどうなったんだ」。校長先生が困った顔で腕を組んで「実はあの帽子、

今は親が被っている」。私は親が帽子を取り上げたと思った。でも皆さん、違うのです。ほとんどの子どもたちがこの帽子を親にあげたのです。自分たちは教室の中で勉強するから暑くても大丈夫。「お父さん、お母さんは外で働いているから太陽の日差しで大変だね」と言って、この帽子を親にあげた。だから今は親が被っている。

今度はミャンマー。この地域は世界で最も貧しい国と言われるところです。そして軍事政権です。町に向かう道がない。これは親子ではありません。手前の子どもは12歳のお姉ちゃん。真ん中が5歳の弟。10歳の妹です。妹は洗濯をして、姉が弟の世話をしている。日本の子どもたちは炊事、洗濯、掃除という家事はお母さんがやるのがあたりまえと思っているけども、ここでは違います。子どもがやるのが、あたりまえなのです。この子どもたちは兄弟仲がいいです。下の妹、弟は、お兄ちゃんやお姉ちゃんをものすごく尊敬する。それはなぜか。面倒を見てもらっているからです。真ん中の子どもがお姉ちゃんを助けている。微笑ましいですね。ちょっと前まで日本もそうだった。これが小学校です。250名あまりの子どもたちが学んでいます。中に入ると日本の小学校とは大違いです。床の上に、べたっと座って勉強している。水道がない。調べてみると大変だった。雨水をためて飲んでいる。こんな汚れた水をそのまま飲む。この地域は水による病気で腸チフスとか赤痢で死ぬ子どもたちが出てきます。川は一杯あるけど日本の川とは大違い。赤い泥の川です。私たちは井戸を掘って大型ポンプで200メートルのところからガソリンエンジンのポンプで汲み上げて、出てきた水を飲んで、子どもたちが「こんな透明なきれいな水は初めて見た」と言います。それをコップに入れて飲んだら「こんなおいしい水は初めて飲んだ」と言いました。皆さん、日本だと水道の蛇口をひねると水が出てきて、それをそのまま飲んでも大丈夫ですよ。しかしこんなところは日本だけなのです。それは世界ではありえない。日本は特別なのです。日本人は水のありがたささえも忘れてる。ミャンマーでは完全な飲み水を手に入れるのは大変なことです。すると村中、総出で集まってきて整列してそして「日本の皆さん、井戸をつくってくれて本当にありがと、助かりました」と何度も言う。特にお母さんたちが喜んでた。

我々はこの国に井戸をつくることを一生懸命やっています。外国の団体が逃げていきます。軍事政権で危ないのです。外国人がこのような中に入って行って捕まった

らアウトです。でも井戸が必要なのです。ずっと調べていたら、先程のような赤い泥のような水を飲んでいるから赤ちゃんが下痢をしてバタバタ死んでいた。そして我々が掘った井戸水を飲んでいるところでは、赤ちゃんの死亡率が10分の1まで下がった地域がある。まさしく水は命に直結するということです。

日本の子どもの優しさは十分に残っている。小学校、中学校の講演で私たちの団体が何をしているかさえ言わない時がある。ましてや募金、とんでもない。口が裂けても絶対言わない。でも起きるのです、募金運動が。その浄財が井戸になって井戸が子どもたちの命を支える。日本の子どもたちがものすごく喜ぶのです。今、日本の教育現場で国際協力の教え方に私は疑問を持っています。皆さんがよく知っている、ある一つの大きな団体、そこではないと国際協力はできないと言っている。とんでもないことです。地域でも学校でも自分たちでも国際協力はできます。日本の子どもたちは自分達の募金は何に使われるか、全くわからない。だから満足感がないのです。しかしこのように命に代わったことを知ると国際協力に心を向けてくれる。そしてもう一つ大事なこと、外国に視野を広げるという大切な教育があるから私たちはあえてこういうことをしているのです。外国には貧しさのために生きていけない子どもたちがいることを知ると、とても大事なことです。子どもたちの募金では足りません。でもそのことを知ってほしいから。

我々はすでに5万人以上の人々の命を支えてきました。自衛隊がイラクで井戸を掘りました。自衛隊がやって36,000人の命を助けた。我々は5万人を越えるところまで、もう少しで6万人の人々の命を助ける事ができます。民間の私たちの手で、これからもどんどん井戸をつくる。なぜか。命に代わっていくからです。

ここはバヤイの村。人口2,200名。ここに入った外国人は私が初めてです。最近まで政府軍が管轄していましたから中に入ると40メートルくらい、兵士たちに囲まれてしまって、皆、目がキラッとしている。「ああ、ここで人生終わったな」と思って、とても怖かった。しかし何とか話してみると、私がミャンマー人とそっくりだということでものすごく仲良くなりました。話してみると皆、いい奴でね。「学校はあるのか?」と聞いたら「50名ほどの子どもたちが学んでいる学校があります」と答えるので「じゃ、見せてくれなにか」と、つれていってもらった。到着してこれが学校

なのかと驚きました。ほったて小屋。私は家畜小屋だと思った。雨期が6月～11月中旬。雨が降り続いて、教室の中が水浸し。ずぶ濡れになる。教科書も濡れてしまう。だから授業ができない。学校は封鎖されてしまう。これは大変だと学校をつくりました。バイイ小学校。道がなくて車が使えない。建築資材を人力で運ぶしかない。ものすごく苦労しました。でも学校ができたなら子どもたちが喜ぶわ、喜ぶわ。「日本の皆さん、こんなすばらしい学校をつくってくれてありがとう。私たちができる恩返しは一生懸命勉強して、そして立派な大人になることです」と言ってくれました。うれしかったです。この村の就学適齢年齢の児童数は150名くらいです。だから150名の規模の学校をつくった。今はすでに300名になっています。子どもが増えてしまった。なぜかと言うと雨期になると雨が降って周りの村にある学校では、勉強ができなくなる。でもバイイ村の学校だったら雨が降っても勉強できると皆、ここに来るようになった。驚いてしまったね、予測以上に急激に増えてしまって。今、増築しています。

さらに森の奥に進む。本当に危ない。何があっても帰れない。なぜあえて行ったか。こんなことを聞いたから。村の子どもたちが皆、目が悪くなっている。それはどういうことかと、むりやり入っていった。到着したのがここです。ここには学校はなかった。だが、子どもたちは一生懸命勉強している。だから、大人たちはお坊さんをお願いして村で一番大きな建物、お寺を借りて勉強していた。なぜ目が悪くなったか、中に入って、よく分かった。窓もない、電気もない。暗闇の中で目をこらすようにして教科書を見ていた。大変な思いをしていました。ここにも何とか今年4月に学校を完成させた。ものすごく遠いところにあるものですから、1年もかかりました。今、子どもたちは明るいところで勉強できるようになったのです。ダンペンフエ小学校と言います。

もう一つ、ミャンマーにつくった学校。マヤンチャウン小学校、2,000名の子どもたちが学んでいます。授業風景です。これは、上のお姉ちゃん達が真ん中の弟達を学校につれてきて勉強している。日本もそうだった。お父さん、お母さんが仕事をしている時は上の子どもが下の子どもをつれて学校に行く。面倒をみながらそして勉強する。この少年は4歳です。お姉さんたちは6時間授業を受ける。4歳の男の子は6時間の間、居眠りしないのです。おしゃべり、バタバタ一切しない。じっと我慢

している。我慢できるのです。我慢を覚えるという事はとっても大事なことです。我慢を覚えると人間は成長が早くなります。子どもたちは学校で鉛筆は芯がなくなるまで使う。文字を間違えた。消しゴムが使えない。彼らは貧乏です。しかし学ぶ姿勢はものすごく真剣です。子どもたちが勉強している姿をみると、こっちが彼らから多くのことを学びます。我々は20校の学校をつくりました。1万人近くの子どもの子どもたちが学んでいます。教育は大事です。

ここはタイの山奥です。元麻薬地帯です。私は山に住んでいる山岳民族の人々について10年以上調査を続けています。アカ族の皆さんを調べたら民族衣装も鮮やかで、美しく、すばらしい。村を歩いて人々と出会うと、皆さん笑顔です。とても愛嬌があって優しい。貧しくても平和な暮らしがあることを祈りながら調べていくのですが、やはり彼らも、ものすごく苦しんでいた。それは極限の貧しさとの戦いです。いかに大変かを調べるかは弱者を見ればわかる。お年寄りたち、障害者の人たち、子どもたち。健康な若い人でさえも生きてることが大変な地域においては弱者に対しては冷たい。時には捨てることだってあるのです。森の奥に小さな小屋があって檻をつくって子どもを閉じ込めていた。知能障害です。子どもたち一人ひとりの健康状態を調べていっても、おなかが、パンと膨れている。これはご飯を一杯たべたからおなかが膨れたのではなく、いつも食べ物がないから、ごはんを食べていないからお腹の中にガスが溜まってきて、膨れてくる。これが人間の最も栄養の足りない時の症状です。栄養失調です。目が落ち込んで死んでいく。

さらに深刻なのは、このへんの人々は平均年収が5万円ということです。タイと比べても10分の1の貧しさです。皆、農業で生計を立てているのですが、ここも雨期がある。7月から11月まで雨が降り続く。山がどろどろになって畑に入れない。農業ができなくなる。すると人々はお金を遣いはたして、食べ物も食べ尽くす。家族が餓死するほど追い詰められていく。お父さん、お母さんを助けるために、家族が生き延びるために娘たちが犠牲になる。少女たちが売られていく。日本の女の子たちは何も変わらない。この子たちは売られていく。いつ売られるか。女の子の中から女性の身体に変化した時、生理が来た時、12、13歳になると売られていく。私は売られる子どもたちの映像は出しません。ただこの村では女の子が17歳までに売られるのは6割近い。半分以

上の子どもたちです。いろいろな子どもたちの問題を調べている中でも、特にこのような娘たちが売られていくのが、最も胸が痛い。彼女たちはまだ性というものを知りません。少女です。でも自分が何をしに売られて行くかはよくわかっています。売春です。最初は嫌だ、嫌だと泣き叫んで、暴れる。でも泣き続けていても、押さえつけても売られていく。エイズになって20歳まで生きることができない娘の方が多い。村に帰る時はエイズが発病して死ぬ時です。この娘たちは「お父さんたちの為だから仕方ありません」と悲しそうに笑っています。

この話をすると日本の子どもたちは「なぜ子どもが親のために売られるんですか。なぜ子どもが親のために死んでいくのか?」と私に聞くのです。日本の子どもたちは親が子どものためにやってあげることが、あたりまえだと思っているけれども、とんでもない勘違いです。子どもが親のためにすることがあたりまえだという考えの方が圧倒的に多い。ここが変なのです、日本は。ちょっと前まではそうだった。子どもが親のためにすることは、本当は当たり前なのです。この娘たちは親の為に死ぬことを覚悟して、その運命を受け入れていく。このような問題で犠牲になるのは男ではなくて女です。村を歩いているとおばあさんが赤ちゃんを抱っこしているのがあまりにも多すぎる。村によってはお母さんがいなくなった村があります。なぜか。皆、死んだからです。我々が会った少女たちは17歳で結婚する。子どもたちが赤ちゃんを産みます。このような地域で子どもを育てるのはものすごく大変な事です。時には愛するわが子が飢え死に寸前まで追い詰められていく。お母さんたちは子どもを助ける為に自らの意思で町に身を売りにいった。そしてエイズに感染して死んでいく。だからおばあさんが赤ちゃんを抱っこしている。

この女性は当時、23歳。髪の毛が抜け出すとエイズが発病だと思っていいそうです。この家を外から見ると不思議な家だった。この家は娘たちを閉じ込める家だった。日本だと小学校4年生からエイズ教育をやっています。でもこの村人たちに対して最近までエイズ教育がされていなかった。エイズは空気感染すると思っていた。娘たちがエイズを発病してボロボロになって帰ってからこの家の中に閉じ込めたのです。一步も外に出さなかった。中で食事はどのように与えたと思いますか。遠くからバナナの葉っぱで包み、バーンと投げる。それを摘むようにして食べる。何の罪もない娘たちが、ここで死ん

でいく。エイズ教育で、空気感染しないと分かってから、少女たちは家で死を迎えることができるようになったそうです。山岳民族の村々にはポスターが貼ってある。「お父さん、お母さん、私を売らないで」と書いてある。タイの中学生くらい女の子一人は13~15万円で買える。中間業者の手数料をとられて3~5万円。親元に渡されるのが10万円程度です。ベトナムのホーチミンだったら10万円、カンボジアのプノンベンだったら5万円で買える。田舎だともっと安い。5,700円とか。人が人を売る。どう思いますか。まだこういう現実がある。ポスターが貼られているということは、今日も娘たちが売られているということです。

タイのバンコクから車で30分のところ。ここは孤児院です。5~15歳の女の子が400名、男の子が1,500名います。しかしここは孤児院ですが、子どもたちにはお父さん、お母さんはいるのです。山に暮らしている人々が食べていくことができない。子どもたちが餓死する。子どもが生きてほしいから子どもを預けて帰っていく。ここで親子は別れ別れになると、ほとんどの子どもたちはもう二度と親と会えない。なぜか。彼らは遠い山からやってくる。電車賃やバス賃が2万円前後かかる。1年間で5万円しか稼げない人にとっては大金なのです。親が帰ってしまうと、もう二度と会えない。お父さんが帰ってしまって呆然としている子どもです。最初は2時間くらいワーワー泣いていたのですが、泣き疲れて不安そうな顔をしています。私の胸の中に残っている親子です。この写真はまさにお父さんと息子が別れようとしている瞬間です。若い山岳民族のお父さんでしたが、子どもを愛する気持ちは日本人と何も変わらない。全く同じなのです。このお父さんはあまりにも辛いものだから、親は手を組んで涙をボロボロ流してずっと泣いていたのです。息子の方はもう別れることを感じている。親子抱きついて離れない。でも別れないとだめなのだ。しょうがないから皆で引き剥がしたのです。すると両方とも大声で泣きました。そりゃ、辛いでしょう。私も人の子の親ですからその気持ちはよく分かる。ここの孤児院も、お金がありません。2,000名近くの子どもたちを養うのは大変です。朝ご飯と夕ご飯、昼食はありません。中身をよく見てください。お粥一杯と魚が一切れ。もちろんお代わりは許さない。子どもたちは食器を舐めるようにして食べる。

ここに1週間ほどいて子どもたちと一緒に寝ていて、

子どもたちが本当に悲しそうなのです。最初に写したごみ捨て場の子どもたちの方が、今死ぬかもわからないという大変な状態で生きている。あの子どもたちがごみの上でダンボールとかベニヤ板でバラックをつくっている。1日中、ごみの上で、下からウジがわいてくる。こんな状態で暮らしている。でもあの子たちは明るくて人なつっこい。なぜか。帰ればお父さん、お母さんに甘えられるから。たとえ片親でもいい。特にお母さんがしっかりしていると子どもの心は安定するのです。お父さん、お母さんがどこかに行っちゃった。でもおじいちゃん、おばあちゃんがしっかりと子どもを保護すると心が落ちつくのです。孤児院では立派な家がある。安心して寝られる。そして毎日生きるだけの食べ物は出る。勉強もできる。でも悲しそうなのです。親に甘えることができないから。大人に甘えることさえも許されない。小さな子どもが悲しい、苦しい、でも甘えることができないから、ガタガタ震えて我慢している。それが痛々しいのです。大学生の皆さん、自分だけで大きくなったと思ったら間違いだよ。人間は小さい時、親に甘えることができるのはものすごく大事なことなのです。

この子どもたちはカンボジアのプノンベンの子ども。男の子が茶髪になっている。これは染めたわけでもない、日焼けしたから赤くなったわけでもない。ご飯を食べてないから栄養が行き渡らなくて髪が太くならない。栄養失調の証拠です。お父さんがいない。当時32歳のお母さんが夜になると路上に子どもを二人抱いて寝る。まだ若いお母さんだから毎日のように暴力を受けていた。時には男たちから性暴力を加えられていた。しかし自分の子どもをちゃんと守っている。

この子どもは両親がいません。シンナーを吸っている。貧しい地域の子どもたちがシンナーを吸っている姿に必ず出会います。シンナーを吸うのは日本とは全く意味が違う。シンナーは一番安い食事。それはご飯なのです。日本のお金だったら10円、そのお金で何か食える。でもそのお金がないから子どもたちは3日も4日も、何にも食べない。人間が1番苦しいのは何も食べないこと。夜も食べなかったら頭がおかしくなる。でもシンナーは安い。5円くらいです。シンナーを吸うと神経がおかしくなって、お腹に何も入ってなくてもひもじいという感じがしない。空腹を誤魔化すために彼らはシンナーを吸う。周りを見ているから、子どもたちはどのように死んでいくか、わかっている。シンナー中毒で死んでいくの

は凄まじいですよ。何回も見てきた。身体がボロボロになって、歯も全部抜ける。シンナーの成分の中には脳を溶かす成分がある。脳が溶けるということは気が狂うということです。よだれを垂らして痙攣して死んでいく。子どもたちは、わかっているのです。自分もそうやって死んでいくことを。でもひもじくて苦しくてたまらないからシンナーを吸って誤魔化している。プノンベンの町を歩いていたのは両親がいない子どもたちです。少年の身長は1メートルあるかないかです。いくつだと思えますか。この子どもは16歳です。高校1年です。食べるものがないのです。

モンゴル。人口約250万人。小さな国です。国の広さは日本全体の4倍以上のとても大きなところ。そのほとんどは草原です。国民の半分以上は今でも遊牧民です。5つの家畜、羊、牛、馬、山羊、ラクダ。遊牧の生活をしている。そういうところでは平和な生活があると思っていた。ただ草原は冬が大変なのです。-40℃くらい。10年に1度、恐ろしい寒さに襲われる。-60℃まで下がる大寒波がやってくる。すると家畜が凍え死んでしまつてこの人たちも食べるものがなくなってしまうこともあります。モンゴルの首都ウランバートル。この国は社会主義体制下に70年近くあった。その当時はソビエト連邦から国家予算の7割近くを無償援助でもらっていた。1990年代初頭、ソ連が崩壊して援助が0になった。モンゴルの経済が壊滅状態に陥ってしまった。会社、工場はどんどんと倒産していった。社会保障制度は全く機能しなかった。町には失業者が増える。極度の貧しさは人々の心も荒廃させる。お父さんたちがイライラして酒を飲んで酔っぱらって子どもたちを殴る親が出てきた。子どもが親に殴られるのは嫌だと家飛び出した。家族全員が追い詰められてバラバラになった。親から逃げ出した子どもたち。私が初めて行った1999年当時、3,000人以上がホームレスになっていました。子どもが「おじさん、僕は3日間、何も食べていないんだ」とポケットからビニールを取り出すとそれを口にくわえてクチャクチャやる。なぜこういうことをするか。恐ろしいほどお腹がすいた時、食べられないもの、例えば新聞紙などを噛んでいると少しだけ空腹が和らぐからだ。片親で靴磨きをしている。お金をもらってやっと生き延びていた。

この子どもは病気なのです。このような世界では助けてもらえない。自分で生きていくしかない。このような



子どもたちが住むところはマンホールの中です。「マンホールチルドレン」と呼ばれていた。ウランバートルは世界で最も寒い首都です。冬は-30℃があたりまえです。火力発電所で石炭を燃やして電気をおこしている。一緒にお湯も沸かしてそのお湯をパイプラインで町に運び、ビルなどの建物の暖房はお湯を使っています。暖房用のお湯のためにマンホールが町のあちこちにある。地上は-30℃、人間は寒くて死んでしまう。お湯の通るマンホールの中は暖かい。何とか生きられるのです。しかし中は凄まじく、ものすごい臭いです。汚水が溜まってごみが散乱していた。中には無数のネズミとゴキブリが散っている。こんなところに、ほんとに人がいるのかと思った。皆さん、見てください。本当にこうしていたのです。これは人間です。幼い子どもです。私は滅多なことでは涙を流しませんけど、この時は自然とぼたぼた落ちていた。この子どもたちが「もう嫌だ、助けてくれ」と叫んでいるように見えてしまったのです。

モンゴルの子どもたちに最初にした支援は、日本で冬物の衣料を集めてウランバートルに持っていく事でした。マンホールの蓋を開けて子どもたちに届けたのですが、中に入っていくと子どもが皆、逃げるのです。5、6歳の男の子が私の姿を見て恐くて震えだした。それから目を塞いで「おじさん、ごめんなさい」と泣き叫んだのです。私に殴られると思って、怯えていました。子どもたちは毎日のように大人たちから暴力を受けているのです。「そうじゃなくて洋服を届けにきたんだよ」と言うと、皆、帰ってきてくれた。その時、気温は0℃です。この少年はワイシャツ1枚だけしか持っていない。ガタガタ震えて唇を紫色にして「助かりました」と何度も言いながら、自分の家であるマンホールの中に帰っていったんです。もう、むちゃくちゃですよ。顔中、虫に刺された跡。唇は腫れあがって、ネズミが走り回っている。

私は現場主義。自分に義務づけることが一つだけあります。それはその土地の人々と同じところに寝る。同じものを食べることを一日でもいいからやっている。私は森の中でも平気に寝られます。蛆虫のわいた寝床でも簡単に寝ることはできるのです。でもマンホールはできなかった。夜中の1時頃、出掛けて行って子どもを抱いて眠ったのですが、1時間ほどすると虫とか嫌なものが顔にやってくる。とてもじゃないが、眠れない。2時間しか眠れなかったですよ。彼らはこのような世界を生き延びているのです。季節は11月、気温は-20℃。マンホ

ールの中にも男の子が8名と女の子が1人住んでいた。中を見ていくと真っ暗、何も見えない。子どもたちは懐中電灯を買うくらいなら食べ物を買う。道具を買うお金があれば。うずくまるようにして生きるしかない。

大学生の皆さん、あなたたちの心の中に「なぜモンゴル政府は自分の国の子どもを助けないのだ」と疑問が生まれるかもしれません。しかし、このようなものの見方は私たちのように豊かな国に住んでいる人の視点なのです。日本で、もしもこういうことが起きたら役所や行政が一発で片づける。それはお金があるからなのです。モンゴルは貧しい。公務員の給料を払えないことがよくあります。一生懸命やっているけれども財政がないから間に合わないのです。大人も貧しくて家族を守るだけで精一杯なのです。だから今は外国の助けが必要なのです。かつて私たち日本人が助けられたように。皆さんにあえてこれを知っていただきたいと思います。我々日本人が世界で最も外国の人々から助けられた民族なのです。これ、わかりますか？ 戦争が終わった後、この国にアメリカだけではない、いろんな国が助けくれた。東海道新幹線、自分でつくった？ とんでもない。外国からの援助です。当時の社会資本の整備は、ほとんど外国からの援助です。だから今の平和と発展がある。しかし、残念ながら日本の大人たちは「外国の子どもは、放っておけ」と言う。モンゴルへの支援、イラクは関係ない。日本のことだけを大事にすればいいという。私はこの考え方に同意しない。なぜなら私たちも助けられた。日本政府もアジアの人たちが助けてくれなければ、こんなに豊かな生活を維持できないのですよ。

マンホールチルドレンと呼ばれる子どもたちの中には女の子もいっぱいいます。男の子よりも娘たちが苦しい。この子どもたちは子どもだけで住んでいる。周りで教えてくれるお姉ちゃんがない。大人もいない。6年前、ウランバートルの街角で10歳くらいの女の子がワーワー泣いている。この股間をみると真っ赤に濡れている。この子はなぜ自分の身体から血が流れているかわからない。だから助けてと叫んでいる。このような娘たちに対する性暴力も深刻です。去年は児童保護施設に住んでいる14歳の少女が死体で発見された。彼女は11歳の時、マンホールの中で住んでいた。ある夜、マンホールに酔っぱらった男が入ってきて、彼女に凄まじい暴力を加えた。身体の傷は治っても心は癒えない。マンホールに暮らしている12歳の男の子が「早く人間を終わりたい」

と言った。そして「僕は次に生まれる時には人間ではなく、犬になって生まれたい」と言ったのです。犬だよ？このような子どもたちが1日も早く人間らしく生きていけることを心から願うのみですね。

児童保護施設ウランバートル「沖縄村」。この子たちが生きていること自体、不思議なのです。この子どもたちは自分の誕生日、自分の名前さえわからなかった。顔つきや身体つきを見て我々が誕生日を決めた。そして名前をつけた。なぜ自分の子どもを捨てるかを考えたことがありますか？どんなことがあっても親は自分を捨てないと思っているでしょう？違いますよ。子どもを愛する気持ちはモンゴル人も日本人も全く同じです。私たちはちゃんと生きていけるから人間らしい心を持っている。でも人間は弱いのです。一週間、何も食べなかったら完全に狂います。簡単に自分の子どもを捨てるのです。たくさん見てきました。これは貧しさが原因です。この学校に関しては我々が教師を15名採用しています。ここは親のいない子ども、貧しくて学校に行けない子どもたちが来る学校です。モンゴルの伝統芸能、伝統音楽などを教えています。児童保護施設も4つできました。最初の頃は13名の子どもたちを預かるにすぎなかったのですが、15名になった。

一度だけモンゴルの子どもたちの保護運動をやめようと思ったことがあるのです。なぜかという寸前のところで子どもたちの命を奪うところだった。3年前、当時までは私たちは現地の行政、現地の団体と提携して毎年6月に彼らの食費や学費、人件費をお支払いして、やっていくという約束だった。それがモンゴルへお金を送るのは面倒なのです。一旦、アメリカに送る。いろんなチェックがあってやっとモンゴルに行くのです。その年の8月にモンゴルに行くことが決まっていたので、私が現金を持っていったらいいや、と。8月に行ったら「あなたがお金を支払うという約束だったのに2か月もずれてしまった。この子どもたちは食べるものがなくなってしまってジャガイモだけで生きていたんです」びっくりしました。お金を渡したから「これでもう1年間生きていける」と。支えてくれる人が少なくて、ほとんど日本のお金でやっていた。それで、やめようと思ったけれど、やめることはできなかった。その子どもたちが生きているから。命があるからなのです。今はたくさん日本の皆さんが助けてくれるから、何とか支えることができるようになっています。モンゴルでは子どもたちの命は日

本の皆さんの優しい心で守られていると思います。彼らはしっかりと生きています。

この子どもたちはほとんど親の味を知らないです。お父さん、お母さんがいないから。今は私のことを信頼してくれるのですが、最近、こんなことを聞きました。私の息子がモンゴルにいて一人ひとりと呼んで「あなたが一番欲しいものはなんですか？」と聞いたら、大きな子どもたちは「パソコン」と言う。小さい子どもたちは物とかお菓子と言うと思ったのですよ。そしたら違うのです。皆、同じ答えでした。「私が一番ほしいのは、僕が一番ほしいのはお母さんです」。母親に一回抱かれてみたい。これは人間の原点ですね。女性の皆さん、母親がしっかりしていることはとても大事なことです。彼らは一生懸命生きている。そしてその一生懸命に学んでいる。

最後にミャンマー。この国は軍事政権、北朝鮮とそっくり。将軍が仕切っているが、国民は大変です。ハンセン病の人々を森の中に閉じ込めて一歩も外に出さない。マラリアで多くの人々の命を奪った。そしてたくさんの人々が生きるために、森の中に、病気で傷ついた人々を閉じ込める。ボロボロの人たちが100名くらいいた。いやあ、凄まじかった。目が見えない人、両足が切断された人。指が腐った人。顔じゅう、腐り果てた人。ガリガリに痩せ衰えて身動きさえできない人。何とも言えなかった。でもこれを見た時は、もう怒りで頭に来てしまっただけ。政府は彼らに早く死んでくださいという政策なのです。ここから帰れない。腐ったものすごい臭いがした。たまらなかった。すぐ引き返してトラックを手配して、100人分の半年分の食糧をトラックに積み込みました。そしてやっと食べ物を届けた。「この人たちを絶対に誰も殺さない」と誓ったのです。「生きてほしい」と思った。でも間に合わない。6名死んでいた。住宅も作り替えて、水道工事もやって、きれいな水が飲めるようにした。すると人々が変わったのです。「日本の皆さんが助けてくれるから、もう生きていける」と。すると笑顔が戻ったのです。誰も最初は笑わなかったですよ。ナチスのアウシュビッツがわかりますか？ あんな状態が出てきた。それが今は、にこにこして私を迎えるようになった。ほんとによかった、うれしかった。

これは去年からの挑戦です。人間は仕事をしないとだめです。働くことは大事なのです。ミシンを40台入れて紡績工場をつくった。このおばあさんは若い時、洋服をしていた。彼女が教える。彼女は右足も不自由だけど、

「教えることがものすごくうれしいんだ」って。この女性は指がほとんど動きません。「でも働ける」と、とっても喜んでいる。この男性は左足が腐った。「自分の力で生きていける希望の光が見えた」と言っていました。71歳のおばあさんは右足がない。手から血が滲み出て、膿が飛び出すのです。「でも働けるんだ」とものすごく喜んでいる。これはやってよかった。この人々の表情に全部表れている。最初の頃はこんな状態でした。

1月と6月に半年分の食糧を届ける。昨年6月に訪ねてみたら全員がほとんど痩せていた。「池間さん、私たち一日一食なんだ」「それは、どういうことだ」と責任者を呼びつけてね。私たちは3食計画して食べ物を届けているのに、なぜこういうことになったのか言わないんです。やっと話してくれた。実は彼らは別の人々に食べ物を分けていたんです。この森の中にはハンセン病以外の人も住んでいる。おじいさん、おばあさんの一人暮らしの人とか高血圧で倒れて動けない人がいる。だからこういう人々の家を回って彼らの現状を見てご飯をあげた。食料をあげることは、命を削ることと一緒になんです。高血圧で倒れた人の面倒をみていた。ご飯をあげていた。驚いたことに、この相手は健康な頃にはハンセン病の人々を徹底的に差別していじめた人だったのです。「そんな意地悪な人、助ける必要はない」と言ったのですよ。そしたら皆に怒られました。「あんたは間違っている。たとえどんなことがあったにしろ、人を憎むだけのそんな心は小さい。そうでなく一緒に生きてくことが大切です。食べ物を分けることはあたりまえだ」と言われました。とても大きな心です。この人たちは優しいです。確かに姿形はボロボロで醜い。でも心は清らかです。この人たちをとっても尊敬している。すばらしい人たちです。

ここはなんだ、へんだぞと思ってむりやり入っていったのです。ここは大変なところだった。ハンセン病の重症患者を閉じ込める家だった。当時、38歳の女性。右足は反対側に、ぐにゃっと曲がって左足は腐ったから切断した。指は1本も残っていない。馬の蹄のようにになっている。髪を振り乱して目玉が飛び出していた。目を背けたらだめだよ。この人も私たちと同じ人間なの。ちゃんと見ることが大事なのだよ。この後、彼女に添い寝をして、右手を肩に突っ込んで、ほっぺたをくっつけて一緒に眠った。そうすると急にワーっと泣きだして「死にたい」と言う。「私を殺してください」と。殺してくれて頼むのです。これを聞いた時にはまいったなと思っ

てね。「食糧も薬も出して住居をつくって人間らしく生きていける環境を我々がつくるから、どうか生きてください」と言ったら「信じません」と言われた。「殺してくれ」と叫んだのです。私は約束を守ってハンセン病の重症患者用の住居をつくりました。それをつくるのに苦労したけれども、一番大変だったのは病気に対する差別と偏見でした。大工が来ない。ものすごい差別なのです。日本人もまだまだハンセン病に対する差別を持っている。ハンセン病はうつりません。弱い菌だから。赤ちゃんや栄養失調で死にそうな場合だけ。普通の状態でハンセン病が移ることはありえない。ちゃんと治療すれば半年で治る簡単な病気なのです。しょうがないから10倍の給料を出すとやっとやってくれました。ハンセン病の基礎教育をやってからやっと応じてくれました。でも二人では何もできない。皆でつくったんです。足が残っている人は荷物を運ぶ。指が残っている人はクギを打つ、ペンキを塗る。この家は皆でつくったから「ユイマールハウス」と名づけた。「沖縄の方言で、お互いが助け合うという意味ですよ」と言ったら「すばらしい名前だ」と喜んでくれました。

皆さん、もう一度、よく見てください。「死にたい」と言った彼女がどうなったか。とても可愛いのです。私が行くと言ったら、ちゃんとお化粧をして待っていてくれた。そして彼女はこう言いました「私はこんな醜い身体になって、人間ではないと思った。だから自分のことを誰も愛してくれるわけがない。毎日、死ぬことばかり考えていた。一回、首を吊った。ロープを首にかけたけど指がないから結べなかった。だから仕方ないから足をかけてロープをかけて首をかけたたらロープが切れた。だから生きている。遠くの日本人たちが約束を果たしてくれた。本当に自分のことを愛してくれることが分かったんだ」って。誰かが自分を愛してくれるとわかった瞬間から彼女は生きたいと願うようになったそうです。そんな彼女が私たちのために「幸せをあなたに」というジャンマーの歌を歌ってくれました。

(歌)

不思議な感情が出てきて、私は彼女に対してものすごくありがたいなと思いました。なんだかね、人間にとって最も大切なことを教えてくれたような気がしたので。人を愛することは大切です。命が生きるから。人を責めることは命を奪う。彼女は今、一生懸命生きている。自らの意思で集団住宅の中に入っていった。そこにはお

じいさん、おばあさん、動けない人達がいる。この方は両足がない、指が1本もない。でも車椅子で走らせるのです。口でタオルをとってこの手でおじいさんのお尻を拭いてあげたり、おばあさんの身体を洗ってあげる。今、この生活の中で一生懸命生きている。そして今年4月、「ミャンマーにもう一度来てくれ」と頼まれました。何事かと思いましたよ。何か大変なことが起こったのか。やっぱり大変なことをしていた。彼女の結婚式です。「殺してくれ」と叫んでいた彼女が結婚したのです。ほんとにうれしかった。私を驚かせるために何も言わなかったそうです。泣いてしまうくらいうれしくて。よかった。彼女が「私に約束したいことがある」お腹をポンポンと叩いて言いました。「池間さん、絶対に私は赤ちゃんを産んでみせる。命がつながっていく」と。

皆さん、この子どもたちは貧しいだけ、内面的にはすばらしい子どもたちが一杯いるのです。逆に日本の子どもたちの方が本当に心配なのです。モンゴルのウランバートルでマンホールチルドレンの子どものそばにいて仲良くなって、落ちついた頃に私の胸のポケットに1枚だけ残っていたガムを「はい、食べなさい」と言うと、その子が、紙のついたまま、小さく千切り始めた。へんな食べ方をするなと思ったら、そうではなく、後ろのお兄ちゃんの仲間、遠くから皆を呼び集めて1枚のガムを小さく千切って分けて食べる。すごい事だと思うのです。

それから「沖縄の家」に住んでいた少女、大きくなって出ていったのですがこの少女は8歳の時に親に捨てられた。親は生きているが、どこにいるかわからない。3ヶ月間マンホールに住んでいた。「あなたの夢はなんですか?」と聞いたら「私の夢は早く大きくなって、そして自分を捨てたお父さんとお母さんを見つけ出して幸せにしてあげること」。その後、「両親がちゃんとご飯を食べているか心配だ」と、ワーッと泣いたのです。教えられますね、子どもたちに。

カンボジアの少女。足を見てください。義足です。この少女は8歳の時、親の手伝いで農作業をしていた時に地雷を踏んで右足をパンッと吹っ飛ばしてしまった。義足です。少女は当時中学3年生でものすごく優秀なのです。この少女の夢は高校、大学に進学してコンピュータのプログラマーか、英語の通訳になること。この子の家庭は貧しいから進学は諦めないといけない。だけどお父さんが彼女にこう言ってくれた。「お前は優しくて利口で親思いだ。そして、ものすごく強い子どもだ。だから

お父さんは貧しいけど畑を売ってお前を高校に行かせることを決めたんだ」と言ってくれたのです。この少女は喜ぶかと思ったら「違います、違います」と首を振って泣いているのです。彼女は「勉強したい。進学をしたい。でも一番うれしいことはお父さんとお母さんが楽になること。だから働いて給料をもらって両親に渡して、お父さん、お母さんの喜ぶ顔が見たい」と言うのです。「日本人たちが応援するから高校に行きなさい」と私が言っても聞かないんだ。彼女は今、仕事をしています。

皆さん、子どもたちは本当にこうなのです。皆さんがいろんな国々に行った時、聞いてみて下さい。「もし仏様がいて、あなたの願い事を叶えるから一つだけ言ってごらん?」と聞いたとします。9割近くの子供たちは「お父さん、お母さんの健康と幸せを願います」と。本当にそうなのです。私たちは豊かさの中で生きているけど、大人、子どもも関係ない。人間にとって最も尊いこと、どこかに遠くに置いてきているような気がします。豊かさの中で生きることは大事なことです。そしてそれを受け入れることもすばらしいことです。でも何が大事か。愛じゃないかと思う心を常に持つこと。食べ物があることは当然ではない。勉強ができることはあたりまえではない。今、生きていることさえも当然ではないのです。とてもありがたいことなのです。日本のほとんどの子どもたちは、親が子どもたちのことをやってあげることかあたりまえだと思っているから親に対する感謝さえもないのです。感謝がないことはどういうことか。生きる力がなくなるということです。ありがたいと思う心を大切に。大切に思えば一生懸命になるのです。感謝こそ生きる力だと私は思っている。いろんな国の子どもたちを見てきたけども、日本の子どもたちが最も生きる力が弱いと思う。それは若者たちを含めてです。これは大人の責任だな、私はそう思う。

私は死んだ子どもも一杯見てきた。せっかく生まれてきたが、お母さんが栄養不良で母乳が出なくて、餓死した。貧乏だから。その時のミルク代は1カ月300円かからない。1日15円のお金がないから死んでいる。ベトナムでは120円の薬が買いきれない。カンボジアでは100円の靴が買いきれなくて、裸足で入ったらバンと踏んで突き抜けて血が出てそれが原因で死んだ子どもがいる。そんな話を聞くと悲しくなる。私たちにとって小さなお金がないために死んでいく命が一杯あることをよく知ってください。

最後に国際協力、ボランティアで大事なことをお伝えして終わりたいと思います。まず一つ目。「理解する、わかる、知る」ということも大切なボランティアです。貧しさのために毎日、多くの人々が死んでいく。そのほとんどが子どもたちということをよく知ってください。二つ目。「少しだけ分ける」ということ。100%の愛はありません。ほんの1%でいいのです。私は100円がなくて死んでいく命をたくさん見てきた。私たちがこのような問題に少しだけ心向けると、間違いなく多くの命が生きる。どうか皆さんの優しい心を、ちょっとだけいいから懸命に生きている子どもたちに分けてあげてください。余裕があったら、余ったものをあげるのじゃない。何か少しだけ我慢して分けるということが大事なのです。そして三つ目。これが最も私が伝えたいこと。一番大切なボランティアは何か。誰かのため、人のため、世の中のため、貧しい国の恵まれない子どもたちのため、とんでもないことです。違います。一番大事なボランティアは「自分自身が一生懸命生きること」なんだ。私はこの映像を見てもらって、こんな子どもたちの話をし、彼ら、彼女が可哀相だ、助けてくれと言っているのではないのですよ。誤解しないでください。この子どもたちはどんなに苦しく、辛くても一生懸命生きているのです。だから大切なのです、私は。そして私が伝えたいことは、皆さんが考えていることと全く反対なのです。我々日本人が、あなたたちがごみ捨て場に住んでいる子どもたちから、マンホールの中で暮らしている子どもたちから一生懸命生きることの大切さを学んでほしいと伝えているのです。一生懸命生きる人だから、自分の命も人の命も尊いと思う。懸命に生きる人だから人の痛み、悲しみが伝わってくる。一番大事なボランティアは自分自身が一生懸命に生きることなのです。

理解すること、少しだけ分けること、そして自分自身が一生懸命に生きること。この3つのことを心からお願いして終わりたいと思います。本当にありがとうございます。以上です。

**司会** 大変貴重なお話ありがとうございました。閉会の言葉を政策学会会長小幡先生からお願いします。

**小幡** どうもありがとうございました。まさに極貧の世界、そこに行かれて、現場主義というか、その中で見る、ふとした可愛い、優しい子どもたちの顔、それをずっと見ていて、我々は何をすればいいのか、どうすればいいのかと今、考えていました。最後に、「生きるということをやっと考えろ。自分たちで生きろ」とおっしゃっていただいて、ふと我に返ったような気がして。我々にもできることはたくさんあるなど。自分たちの食べていること、勉強していること、友だちと一緒に学校に来ていることに感謝する。ありがたく思って、その中でボランティアをやっていくこと。大変貴重なお話を聴かせていただきました。支援すること、それは本当にやってあげるとか、やるということではなく、現場で一緒に生きるということを伝えられて、皆さんも共に考えられたと思います。すばらしい写真とともに映像を見て、お話を聴いて、両親に感謝することも含めて、皆さん、それぞれに持ち帰って考えていっていただきたいと思います。今日は本当にありがとうございました。

**司会** それではこれを持ちまして政策学会冬期公開講演会を終了させていただきます。池間さんに盛大な拍手をお願いいたします。どうもありがとうございました。

#### 付記

本稿は、2006年12月14日に行われた立命館大学政策学会主催による冬季公開講演会の全記録である。